

日中韓三か国における漢字教育の現状と課題

文 楚雄ⁱ，伊藤 隆司ⁱ，盧 載玉ⁱ

日中韓三か国は漢字文化圏である。漢字の使用については、中国では昔も今も漢字ばかりで、それ以外の代用手段はない。日本では漢字だけでなく、仮名が併用される。韓国では漢字が廃止され、ハングル文字だけが使用されているが、小学校では漢字教育の教材を配布し、自主学习を展開させており、中学校、高校では漢文科目が設けられ、漢字1800字の取得を目標にしている。三か国の漢字使用の状況はまったく違うが、共通して漢字教育の問題がある。私たち漢字文化に関わる研究者は研究プロジェクトを立ち上げ、産業社会学会の補助も受けて日中韓三か国の漢字教育について比較研究を行っている。研究のねらいは三か国の漢字教育の現状や課題を明らかにすることである。なお、第一部は伊藤隆司が、第二部は文楚雄が、第三部は盧載玉が執筆した。

キーワード：学年別漢字配当表、音読み、訓読み、語文教学大綱、啓蒙教育、三字経、ハングル専用、ハングル漢字併記、漢字教育復活論

第1部 日本の小学校における漢字教育の 現状と課題

はじめに

紀元前1500年頃の殷朝時代に基本的な体系が整備された漢字が日本にもたらされたのは、およそ三世紀から四世紀の頃であった¹⁾。その後、漢字は日本語の表記に用いられ、漢字をもとにした平仮名や片仮名が発明された。漢字に関しては、これまでに多くの研究が積み重ねられているが、ここでは、小学校の教育課程に焦点をあてて、日本における漢字教育の現状と課題について検討してみたい。

1. 学習指導要領と教科書

日本の小学校における教育課程の基準は、公立・私立共に、文部大臣が告示する学習指導要領によっ

て定められている（学校教育法施行規則第25条）。学習指導要領は、ほぼ10年おきに改訂され、現在（2015年）使用されているのは、2008年に告示されたものである。

小学校の教育課程は、国語、社会、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭、体育の「各教科」、及び「道徳」「外国語活動」「総合的な学習の時間」「特別活動」で構成されており、漢字教育が行われるのは「国語」の授業である。

小学校各学年の年間授業時数（授業時数の一単位時間は45分）に占める「国語」の授業時数は、第一学年の場合、年間総授業時数850時間のうち306時間である。以下、学年ごとの総授業時数と「国語」の授業時数は、第二学年910-315、第三学年945-245、第四学年980-245、第五学年980-175、第六学年980-175であり、低学年ほど「国語」の比重が高くなっている。

学習指導要領において、「国語」の目標は、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え

i 立命館大学産業社会学部教授

合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め尊重する態度を育てる」こととされている。また、「国語」の学習内容は、三領域（「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」）および一事項（「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」）で構成されており、漢字教育は、このうち、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に位置づけられている。

学校教育で使用される教科書は、1903年から1945年の間は国定制度であったが、その後は一貫して検定制である。学習指導要領に準拠して編集される小学校教科書は、通常4年ごとに改訂される。2015年度に改訂された最新版の国語教科書は、5社（光村図書、東京書籍、教育出版、学校図書、三省堂）から出版されており、光村図書のものが5割以上の採択率を占めている。

また、漢字教育は、通常、国語教科書に教材として盛りこまれた物語や説明文などの文章を用いて行われるため、漢字教育だけの専用教科書は作成されていない。そのため、児童は、学校が副教材として指定する参考書や、民間の出版社が編集している各種の市販ドリルなどを用いて漢字を学習するのが一般的である。

2. 現行版小学校学習指導要領（2008年版）における漢字教育

(1) 小学校で習得すべき漢字

小学校6年間において習得しなければならない漢字の総数は1006字である。学習指導要領が示す「学年別漢字配当表」によれば、以下のように、1年生に80字、2年生に160字、3年生に200字、4年生に200字、5年生に185字、6年生に181字が配当されている。

【第一学年配当漢字】（80字）

一右雨円王音下火花貝学気九休玉金空月犬見五口校
左三山子四糸字耳七車手十出女小上森人水正生青夕
石赤千川先早草足村大男竹中虫町天土二日入年白
八百文木本名目立力林六

【第二学年配当漢字】（160字）

引羽雲園遠何科夏家歌画回会海絵外角楽活間丸岩顔
汽記帰弓牛魚京強教近兄形計元言原戸古午後語工公
広交光考行高黄合谷国黒今才細作算止市矢姉思紙寺
自時室社弱首秋週春書少場色食心新親図数西声星晴
切雪船線前組走多太体台地池知茶昼長鳥朝直通弟店
点電刀冬当東答頭同道読内南肉馬売買麦半番父風分
聞米歩母方北毎妹万明鳴毛門夜野友用曜来里理話

【第三学年配当漢字】（200字）

悪安暗医委意有員院飲運泳駅央横屋温化荷界開階寒
感漢館岸起期客究急級宮球去橋業曲局銀区苦具君係
軽血決研県庫湖向幸港号根祭皿仕死使始指齒詩次事
持式実写者主守取酒受州拾終習集住寄宿所暑助昭消
商章勝乘植申身神真深進世整昔全相送想息速族他打
对待代第題炭短談着注柱丁帳調追定庭笛鉄軀都度投
豆島湯登等動童農波配信箱畑発反坂板皮悲美鼻筆氷
表秒病品員部服福物平返勉放味命面問役葉由油有遊
予羊洋葉陽様落流旅両緑礼列練路和

【第四学年配当漢字】（200字）

愛案以衣位罍胃印英栄塩億加果貨課芽改械害街各党
完官管関観願希季紀喜旗器機議求泣救給拳漁共協鏡
競極訓軍郡徑型景芸欠結建健験固功好候航康告差菜
最材昨札刷殺察参産散残士氏史司試児治辞失借種周
祝順初松笑唱焼象照賞臣信成省清静席積折節説浅戦
選然争倉巢束側統卒孫帯隊達單置仲貯兆腸低底停的
典伝徒努灯堂働特得毒熱念敗梅博飯飛費必票標不夫
付府副粉兵別辺変便包法望牧末満未脈民無約勇要養
浴利陸良料量輪類令冷例歴連老勞録

【第五学年配当漢字】（185字）

圧移因永管衛易益液演応往桜恩可仮価河過賀快解格
確額刊幹慣眼基寄規技義逆久旧居許境均禁句群経潔
件券険検限現減故個護効厚耕鉸構興講混査再災妻採
際在財罪雑酸賛支志枝師資飼示似識質舍謝投修述術
準序招承証条状常情織職制性政勢精製税責績積設舌
絶銭祖素総造像増則測厲率損退賃態断築張提程適
敵統銅導徳独任燃能破犯判版比肥非備儀評貧布婦富
武復復仏編弁保墓報豊防貿暴務夢迷綿輸余預容略留
領

【第六学年配当漢字】（181字）

異遺域宇映延沿我灰拡革閣割株干卷看簡危机揮貴疑
吸供胸郷勤筋系敬警劇激穴絹権憲源嚴己呼誤后孝皇
紅降鋼刻穀骨困砂座濟裁策冊蚕至私姿視詞誌磁射捨
尺若樹収宗就衆從縦縮熟純処署諸除将傷障城蒸針仁
垂推寸盛聖誠宣專泉洗染善奏窓創装層操蔵蔵存尊宅
担探誕段暖值宙忠著庁頂潮賃痛展討党糖届難乳認納
脳派背拝肺俳班晚否批秘腹奮並陞閉片補暮宝訪亡忘
棒枚幕密盟模訳郵優幼欲翌乳卵覽裏律臨朗論

小学校における「学年別漢字配当表」の漢字の書体には、一般の出版物で広く使われる「明朝体」や「ゴシック体」ではなく、「教科書体」が使われている。「教科書体」は、国定教科書を国営の印刷会社が印刷していた時代に、小学生が手書きで漢字を書く際のモデルとして、筆記体をベースにデザイン化された日本独自の書体である²⁾。小学校用の教科書は、国語に限らず、すべての教科の教科書が「教科書体」で印刷されているが、中学校以降の教科書では「明朝体」が使われている。

(2) 漢字教育の目標及び内容

文字に関する事項の指導目標及び内容は、学年ごとに次のように定められている。

まず、第一学年の目標は、「学年別漢字配当表の第一学年に配当されている漢字を読み、漸次書き、文や文章の中で使うこと」である。続く第二学年の目標は、「学年別漢字配当表の第二学年までに配当されている漢字を読むこと。また、第一学年に配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、第二学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと」である。以下、第六学年まで、順次同様の目標が繰り返されている。つまり、「学年別漢字配当表」によって各学年に配当された1006字の漢字に関して、「読み方」については配当学年で習得し、「書き方」については次の学年を含めた2年間で習得することが目標とされているのである。

また、漢字の「読み」「書き」以外の目標としては、第三学年及び第四学年で「漢字のへん、つくりなど

の構成についての知識をもつこと」、第五学年及び第六学年では「仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること」が挙げられている。

(3) 指導上の留意点

現行の小学校学習指導要領は、漢字の「指導計画の作成と内容の取り扱い」について、次の諸点に留意することを求めている。

- ①学年ごとに配当されている漢字は、児童の学習負担に配慮しつつ、必要に応じて、当該学年以前の学年又は当該学年以降の学年において指導することもできること。
- ②当該学年よりあとの学年に配当されている漢字及びそれ以外の漢字については、振り仮名を付けるなど、児童の学習負担に配慮しつつ提示することができること。
- ③漢字の指導においては、学年別配当表に示す漢字の字体を標準とすること。

これらの指示によって、「学年別漢字配当表」の扱いの柔軟性が確保された。とりわけ、振り仮名を付ければ、上級学年に配当されている漢字や、学年別漢字配当表に載っていない常用漢字を教科書で使えるようになったことで、児童が漢字に接する機会の充実化が図られた。また、筆記体をデザイン化した「教科書体」を標準の字体としているのは、児童が手書きによって漢字を習得することを考慮するとともに、字体モデルの統一化を図ることによって指導のプレを防ぐためである。

3. 漢字および漢字教育の変遷

(1) 日本で使用される漢字の変遷

近代の日本において、国が制定した「漢字表」は、1900年の小学校令施行規則第三号表（1200字）を始めとして何度も改訂されてきた。そのうち、学校教育のみならず、国民生活に大きな影響を与えたものは、1946年に内閣告示された「当用漢字表」（1850字）と、それを改訂して1981年に告示された「常用漢字表」（1945字）、そして、それを見直して2010年に改訂された現行の「常用漢字表」（2136字）である。

① 当用漢字表

1946年に制定された「当用漢字表」は、法令・公用文書・新聞・雑誌および一般社会で使用する漢字の「範囲」を示したものであり、漢字の使用を「あまり無理がない範囲」に「制限」するためのものであった。そして、この「当用漢字表」の制定に合わせて、1948年に「当用漢字別表」(教育する漢字881字)や「当用漢字音訓表」(漢字ごとの音訓)、1949年に「当用漢字字体表」、1951年に「人名用漢字別表」(人名用追加漢字92字)など一連の漢字表の整備が進められた。また、この時期に、複雑で画数の多い「旧字体」に代わる「新字体」が示されたことや、小学校教育のためのいわゆる「教育漢字」(881字)をまとめた「当用漢字別表」が示されたことは画期的であった。

② 常用漢字表・改訂常用漢字表

その後、漢字の使用制限を目的とした「当用漢字表」に代わって、「一般の社会生活において、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安を示すもの」として作られたのが、1981年に告示された「常用漢字表」である。そして、漢字の使用状況の変化を踏まえて更に見直されたものが、2010年に告示された「常用漢字表」である。

2010年に改訂された現行の「常用漢字表」では、使用頻度の少なくなった勺・鍾・銃・脹・匂の5字が削減され、新たに196字が追加されたことにより、総数2136字種となった。この「常用漢字表」こそ、今日の日本で通常使用されている漢字の「目安」となっており、日本の学校教育においては、高校までに「常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字が書けるようになること」が目標とされている。

(2) 学年別漢字配当表の変遷

当用漢字表や常用漢字表とは別に、学校教育のための漢字を整備した「学年別漢字配当表」が小学校学習指導要領に盛り込まれるようになったのは1958年度改訂版からである。「学年別漢字配当表」に含まれる漢字の字数や配列については、学習指導要領が改訂されるたびに検討が加えられた。

学習指導要領の改訂年度および「学年別漢字配当表」の学年別字数の変遷

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
1958年版	46	105	187	205	194	144	881
1968年版	46 *30	105 *70	187 *78	205 *68	194 *69	144 *115	881
1977年版	76	145	195	195	195	190	996
1988年版	80	160	200	200	185	181	1006
1998年版	80	160	200	200	185	181	1006
2008年版	80	160	200	200	185	181	1006

(注) 1968年告示版学習指導要領における*印は、1学年上級の学年に配当された漢字の内から下の学年に繰り下げて学習すべきものとされた漢字の数である。

主な改善点は次の通りである。

複体の字よりも後の学年に配当されていた単体の字の配当学年が修正された。たとえば、第四学年に配当されていた「言」が、88年版から第二学年に配当された。

漢字の意味に対応関係があるものが同一学年に集約された。たとえば第二学年から第四学年にかけて配当されていた「父・母・兄・弟・姉・妹」が88年版からすべて第二学年に配当された。また、小学校の学年別漢字配当表に含まれていなかった「裏・捨・迎・閉」が配当表に加えられ、「表・裏」「捨・迎」「送・迎」「開・閉」など、対応関係のある漢字の効率的な学習が可能になった。

漢字の構成上基本的な字が低学年に配当された。たとえば、88年版から「羽・弓」が第二学年に、「羊」が第三学年に配当された。

4. 日本の漢字教育が抱えている課題

(1) 日本語の特質に由来する課題

日本語の表記においては、漢字・平仮名・片仮名・ローマ字という4種類の文字が使われるため、漢字だけでなく、4種類の文字を必要に応じて適切に使いこなさなければならない。そのため現行の学習指導要領においては、第一学年において、80字の配当漢字に加えて平仮名と片仮名を学習し、第三学年ではローマ字を学習することになっている。

また、日本語の場合、漢字の活用に関して、次のような特色がみられる。

まず、日本語における漢字の発音（読み方）には、「音読み」（漢字の中国語の発音に由来する読み方であり、受容時期によって呉音・漢音・唐音などがある）と「訓読み」（漢字を和語によって読む読み方であり、日本語の義を翻訳的に対応させたもの）の二種類がある。たとえば「治」のように、複数の「音読み」（ジ・チ）や「訓読み」（おさ-める・おさ-まる・なお-る・なお-す）を持つものが少なくない。

また、「訓読み」において、同じ発音でありながら異なる意味を持つ同音異義語が少なくない。たとえば、国を「おさめる」というときは「治める」と表記するが、「税金をおさめる（納める）」「身をおさめる（修める）」などのように、意味によって異なる漢字が使用される。

さらに、動詞・形容詞に語形変化がない中国語と異なり、日本語の場合は語形が変化する。このため、たとえば「来る」（く-る）、「来ない」（こ-ない）のように、いわゆる「送り仮名」が用いられる。

こうした特質によって、日本の小学生は、漢字に関して、学校教育のカリキュラムの限られた時間の中で、4種類の文字、「音読み」「訓読み」、同音異義語、送り仮名といった多くの課題を学習しなければならない。たとえば、「上」という漢字の場合、「ジョウ」（音読み）、「うえ」（訓読み）という読み方の他に、「上（あ）がる」「上（あ）げる」「上（のぼ）る」などといったさまざまな用法を学ぶことになる。

(2) 字体・字形・書体に関わる課題

一般に、目に見える文字の形そのものを総称して「字形」と呼び、その「文字の骨組み」のことを「字体」という。そして、「字体」を印刷文字などに具体化する際に視覚的な特徴となって現れる一定のスタイルの体系を「書体」（明朝体、ゴシック体、教科書体など）という。

先述したように、現在の日本の小学校教科書は「教科書体」という書体が使われている。「教科書体」は、かつて国定の教科書を国営の教科書印刷会社が独占的に印刷していた時代に、文字を手書きで学習する児童の便宜を考慮して、筆記体の文字に似

せて設計されたフォント（書体）である。ただし、教科書が検定制度に変わった現代においては、教科書会社がそれぞれ独自の「教科書体」を使用しているため、デザインの細部は様ではない。

また、「教科書体」が使われているのは小学校の教科書だけであり、中学校以降の教科書では、一般社会の印刷物と同様に、すべて「明朝体」や「ゴシック体」が使われている。このため、たとえば、小学校の教科書において教科書体で「冷」「令」と印字される漢字が、中学校や高等学校の教科書では明朝体で「冷」「令」と印字されており、同一の「字体」でありながら「字形」に相当な差異が生じる場合がある。また、教科書体の「氏」や「比」は、明朝体では「氏」や「比」となり、あたかも字画数が異なる文字のように見える場合もある。

教科書会社によって、あるいは、小学校と中学校の教科書において、印刷に使われている文字の書体が異なっているという事実は、日本における漢字教育の一貫性を確保する上で留意されるべき点であるにもかかわらず、日本の教育関係者の間で必ずしも知られていない。

(3) 筆順および字形の細部の指導に関する課題

日本の小学校学習指導要領は、漢字の標準字体については「学年別漢字配当表」で明示しているが、「とめ」「はね」「はらい」といった字体の細部や、筆順については直接言及していない。そこで、これらについては、学習指導要領とは別の、次のような規定があることを知っておかなければならない。

まず、筆順については、1958年に公表された文部省編「筆順指導の手びき」が、現在も有効な基本文庫である。そこでは、筆順の「大原則」「原則」「特に注意すべき筆順」などが具体例をふまえて解説されている。

また、字体の細部については、2010年に告示された「常用漢字表」の「（付）字体についての解説」がもっとも公的な文献である。そこでは、「明朝体のデザイン」には多様性があり、漢字の字体（文字の骨組み）が同じであっても書体設計上において表現

の差が見られるということが指摘されている。また、明朝体活字と筆写(楷書)に関して、字体としては同一のものであっても「印刷文字と手書き文字におけるそれぞれの習慣の相違に基づく表現の差と見るべきもの」があるとして、次のような具体例が示されている。

長短に関する例 雨・戸・無
 方向に関する例 風・比・仰・主・年・言
 つけるか、はなすかに関する例 又・文・月・条
 はらうか、とめるかに関する例 奥・公・角・骨
 はねるか、とめるかに関する例 切・改・酒・陸
 その他 令・外・女・叱

要するに、これらの漢字については、文字の骨組みとしての字体が同一であれば、書体のデザインの詳細部にこだわる必要はないということである。

漢字の筆順や、字形の詳細に関するこうした公式見解が存在しているにもかかわらず、日本の漢字教育の現場においては必ずしも周知徹底されていない。そのため、無理解な指導者による漢字教育の混乱を招く原因となっている³⁾。

(4) 初等教育と中等教育との連携に関わる課題

小学校の場合、6年間で習得すべき漢字は、学習指導要領の「学年別漢字配当表」によって具体的な字種(1006字)が挙げられている。これに対して、中等教育の場合は、学習すべき字種が指定されていない。

現行の中学校学習指導要領(2008年版)は、中学校一学年における「漢字に関する事項」の指導内容について、「学年別漢字配当表に示されている漢字に加え、その他の常用漢字のうち250字程度から300字程度までの漢字を読むこと」「学年別漢字配当表の漢字のうち900字程度の漢字を書き、文や文章の中で使うこと」と定めている。第二学年では「第一学年までに学習した常用漢字に加え、その他の常用漢字のうち300字程度から350字程度までの漢字を読むこと」「学年別漢字配当表に示されている漢字を書き、文や文章の中で使うこと」、第三学年では「第二学年までに学習した常用漢字に加え、その他の常

用漢字の大体を読むこと」「学年別漢字配当表に示されている漢字について、文や文章の中で使い慣れること」となっている。

このように、中等教育においては、漢字の学習範囲が、小学校の「学年別漢字配当表」を超えて常用漢字にまで拡大されているものの、具体的な字種や配当学年などが明示されていない。このため、実際の漢字学習は、それぞれの教育現場で採用されている教科書や、国語科担当教員の裁量に委ねられているのが現実である。

おわりに

以上、日本の小学校の教育課程に焦点をあてて検討してきたが、日本の漢字教育の現状と課題をいっそうリアルに把握するためには、教育課程のみならず、教育現場で展開されている実際の漢字教育実践を視野に含まなければならない。たとえば、福井県では、教育委員会による『小学校学習漢字解説本 白川静博士の漢字の世界へ』(2011年平凡社)が編集され、白川静文字学に基づく独自の漢字教育が行われている。そうした実践については、引き続き検討していきたい。

注

- 1) 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所編『白川静の世界 I 文字』(平凡社, 2010年) 2頁
- 2) 阿辻哲次『漢字再入門』(中央公論新社, 2013年) 61頁
- 3) たとえば「女」という漢字の二画目と三画目の線を、「女」のように交差させるのか、「女」のように接するだけにしておくのかといった点について、指導者間で混乱が生じる場合がある。この場合は、同一字体であり、細部の差はデザイン上の差異でしかない。

主要参考文献

1. 阿辻哲次『漢字の相談室』(文藝春秋, 2009年)
2. 阿辻哲次『漢字再入門』(中央公論新社, 2013年)

3. 石井順治他『シリーズ授業①国語 I 漢字の字源をさぐる』(岩波書店, 1991年)
4. 今野真二『常用漢字の歴史』(中央公論新社, 2015年)
5. 金田一春彦『日本語新版(下)』(岩波書店, 1988年)
6. 国字問題研究会『美しい日本語と漢字の教育』(あゆみ出版, 1981年)
7. 三省堂編修所編『新しい国語表記ハンドブック第七版』(三省堂, 2015年)
8. 白川静『漢字』(岩波書店, 1970年)
9. 専修大学図書館編『日本語の風景』(専修大学出版局, 2015年)
10. 福井県教育委員会編『小学校学習漢字解説本 白川静博士の漢字の世界へ』(平凡社, 2011年)
11. 宮下久夫『分ければ見つかる知ってる漢字』(太郎次郎社, 2000年)
12. 山口仲美『日本語の歴史』(岩波書店, 2006年)
13. 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所編『白川静の世界 I 文字』(平凡社, 2010年)
14. 文部科学省『小学校学習指導要領解説国語編』(東洋館出版社, 2008年)

第2部 中国の漢字教育の現状と課題

はじめに

中国は昔も今も漢字ばかりが使用され、いざという時にも代用手段がなく、漢字を書かなければならない。漢字が分からなければ読み書きはできないのである。したがって、子供たちにとっては、いかに早く、いかに多く漢字を習得するのがきわめて重要である。これは国語の理解や上達の問題だけでなく、他の教科の理解や上達にも大きな影響を与え、ひいては一生涯にも影響を与えてしまう。そのため、漢字教育については千数百年前から研究し続けている。数えきれないほど数多くのすばらしい研究成果が出ている。しかし、それでも漢字教育の問題はもう研究し尽くし、課題も解決したということにはならない。今もなお多くの問題が存在しているだけでなく、新たに今日的な課題も生まれている。第2部ではこ

のような状況を踏まえ、中国の漢字教育について整理し、そこに潜んでいる問題点や課題を明らかにすることを試みてみる。

1. 「語文教学大綱」

(1) 2000年の試用改訂版

中国の小学校の教育には教育部が制定した「教学大綱」というものがある。日本の学習指導要領に当たると思うが、「教学大綱」は教育課程(国語, 算数, 音楽など)ごとに制定されている。国語の場合は《九年義務教育全日制小学語文教学大綱》というものがある¹⁾。以下、《語文教学大綱》と略称するが、今実施されているのは2000年に制定した試用改訂版である。《語文教学大綱》は「教学目的」, 「教学の内容と目標」, 「教学過程における留意点」, 「教学の評価」, 「教学の設備」, 「付録」から構成されている。

「教学の内容と目標」の章には次のような8項目の目標を設定している。①ピンイン(中国式ローマ字)の正確の発音や書き方をマスターする。②常用漢字3000字前後が読める。その内の2500字前後は書くこともでき、意味も理解できる。③ピンインなどの2種類の方法を使って手軽に辞書を調べることができる。④ペンを用いて正しく且つ綺麗に字を書くことができる。筆による模写はきちんとできる。⑤読書に興味を持ち、中程度の文章についてその意味, 感情, 表現手法などを理解することができる。標準の発音で本文を朗読することができる。150篇前後の優れた文章や詩を暗唱する。⑥読書の習慣を身に付け、6年間で課外読書の総量は漢字150万字以上とする。⑦自分が見聞・感受・想像したものを文字で書き下ろすことができる。間違い字や句点が出ないことを目指す。⑧礼儀正しく口頭によるコミュニケーションを行い、相手の話の内容を正確に理解でき、自分の意見を正確に伝えることができる。

学年については、第1, 2学年は低学年, 第3, 4学年は中学年, 第5, 6学年は高学年に分け、それぞれの学習の目標を設定している。低学年では、常用漢字1800字前後を習得し、その内の1200字前後

は書くこともできる。基本的な書き方、部首の書き方、書き順などをマスターする。1学年に優れた詩文を30篇前後暗唱する。第2学年の課外読書は漢字5万字以上とする。書くことに興味を持ち、自分の言いたい言葉を書き下すことができる。中学年では、常用漢字累計2500字前後を読むことができ、その内の2000字前後は書くこともでき、意味も理解できる。1学年に優れた詩文を30篇程度暗唱する。第3学年の課外読書は漢字15万字以上、第4学年は30万字以上とする。自分の見聞、感受、想像を書くことができる。討論の時には自分の意見を正確に表現できる。高学年では、常用漢字累計3000字前後を読むことができ、その内の2500字前後は書くこともでき、意味も理解できる。1学年に優れた詩文を20篇程度暗唱する。課外読書は各学年漢字50万字以上とする。簡単な記述文や想像文を書くことができ、40分で漢字400字の作文ができる。作文は1学年に16回程度行う。自分の見聞を正確に口述できる。1つのテーマについて2、3分程度発言できる。

このように《語文教学大綱》では漢字教育について、漢字の数、漢字の発音、書き方、意味の理解などを明確に規定している。また、読書や作文、口頭による表現力などについても規定している。

(2) 《義務教育語文課程標準》

2011年に中国教育部は2000年の《語文教学大綱》及び2001年試用版の《義務教育語文課程標準》を整理し、2011年版の《義務教育語文課程標準》を公布した²⁾。以下《語文課程標準》と略称するが、大まかな内容は《語文教学大綱》と同じで、違うのはさらに詳細に分類して条文化にしている点である。

《語文課程標準》では9年の義務教育を4段階に分け、第1段階は第1、2学年、第2段階は第3、4学年、第3段階は第5、6学年、第4段階は第7、8、9学年としている。各段階に統一した5項目の学習内容や到達目標を設けている。5項目の内容は次のようになっている。1. 漢字の学習、2. 読書、3. 作文、4. 口頭による表現力、5. 総合学習というものである。漢字学習については次のように設

定している。第1段階では1600字前後読むことができ、その内の800字前後は書くこともできる。第2段階では、累計2500字前後読むことができ、その内の1600字前後は書くこともできる。第3段階では、累計3000字前後読むことができ、その内の2500字前後は書くこともできる。第4段階では、累計3500字前後読むことができる。小学校卒業時の漢字学習の目標は《語文教学大綱》と変わらないが、各学年の配分は少し調整されている。即ち低学年の漢字学習の量は200字ほど減らされている。

2. 教科書

(1) 代表3社の教科書

全国の手出版社や地方の出版社などは《語文教学大綱》に基づき、多種多様な教科書や参考書を編集して出版している。もっとも代表的なものは人民教育出版社から出されたものを挙げることができる³⁾。人教社は中国教育部傘下にある出版社で、全国に大きな影響力を持っている。

人教社の教科書の漢字の学習数は次のようになっている。1年生の前期400字、後期550字、2年生の前期350字、後期300字、3年生の前期300字、後期300字、4年生の前期200字、後期200字、5年生の前期150字、後期150字、6年生の前期120字、後期80字、小学校6年で累計3100字を学習することになっている⁴⁾。この数は《語文教学大綱》に規定している3000字前後の目標と合致している。

北京師範大学出版社から出された教科書も代表的なもの1つである。漢字の学習数は次のようになっている。1年生の前期334字、後期402字、2年生の前期432字、後期420字、3年生の前期230字、後期230字、4年生の前期210字、後期240字、5年生の前期240字、後期190字、6年生の前期130字、後期0字、小学校6年で累計3058字を学習することになっている⁵⁾。《語文教学大綱》に規定している3000字前後の目標と合致している。

各地方自治体では地方版の教科書を数多く出版している。地方版の教科書はもちろん全国の教科書審

査委員会の審査を経て出版しているものである。例えば湖南省なら湖南教育出版社から湖南省小学校用の教科書を出版している。江蘇省なら江蘇省小学校用の教科書を江蘇教育出版社から出している。江蘇省版の教科書の漢字の学習数は次のようになっている。1年生の前期255字，後期263字，2年生の前期406字，後期386字，3年生の前期372字，後期374字，4年生の前期350字，後期250字，5年生の前期252字，後期223字，6年生の前期206字，後期137字，小学校6年で累計3476字を学習することになっている⁶⁾。この数は《語文教学大綱》に規定している3000字前後の目標を大きく上回り，他社の教科書より400字ほど多く取り入れ，主として高学年の5，6年生のところで漢字を増やしている。

(2) 常用漢字及び各学年の学習漢字

上記の3教科書が示しているように，どの教科書も教育部の《語文教学大綱》に規定している漢字習得数の目標に達しているが，1学期，1学年の習得数は必ずしも一致しておらず，ばらつきは大きい。この現象は《語文教学大綱》に起因していると考えられる。そもそも《語文教学大綱》は低中高3段階の学習目標数しか規定しておらず，各学期，各学年の学習目標数は規定していないのである。9年義務教育の3500字についても指定はしているが，学年ごとの指定ではなく，発音順或は画数順に常用漢字2500字，次常用漢字1000字を指定しているだけである。また，漢字の出る順も特に規定してなく，出版社に委ねている。2000年版の《語文教学大綱》には3500字の付録が付いていない。これは教育部が1988年に常用漢字3500字を発表しているのだから，それに準ずることと考えていたのだろう。2011年の《義務教育語文課程標準》には常用漢字表の付録が付いている。

教育現場では学年ごとの学習漢字の指定がなければ，たいへん困る。指定されていないので選定した教科書に従うしかない。幸い近年多くの民間学習機関などは各社の教科書を整理し，学年ごとの学習の漢字をまとめ，ホームページに公開したりしている。

例えば，「第一範文網」というネットのホームページでは小学校6年の2933字を学期ごとに下記のように整理して公開している⁷⁾。

第1学期は182字。

一五上玉米木禾竹子瓜大果多十月日头口目手足走左右二三四五六七八九草地马牛人父女坐立天上水中下爸妈好我爱国你是他们北京安门前升白云的鱼儿青山课了小不要里皮拍冬有个口叫家起早和丁来学校同鸟花开可捉摘叶秋到树只在飞园红黄还劳动笑船两尖只看见闪星新放后这那工厂说会衣洗把奶种赶鸡谷场公吃拿病做给讲故事听过桥时雨人去又怕冷就出长当也雪看着回找对太阳老年毛点都乐得进步真高少想师

第2学期は273字。

背书包林向玩吧边生快送什么呢朵写兴地路亮跑它许告诉她春风吹绿桃醒蛙姓李张弓长章古胡吴王谁刚很倒扶候吗认识乌鸦喝渴处君办法光朋友心没块用力破得祖欢清羊甜燕暖住海唱各种捡篮从南方往奇怪问底油了洞龙火车村运变化爷孩卫员医先自己纸完作业成扔踢脸饭香农民粮哪漂亮穿布午帕连忙袜睡院啊语问颗黑请片座再兔干哈比半觉刻以猴扛棵满捧圆抱跳空猫钓条气怎意话样画远色近无声惊松尾巴觉软能原啊别身当游今空闷田低为虫才明球浮几伸根枝钩文勇敢窗外影柳碰盆东读每带知道分件考试礼貌妹谢茶跟飘飘常喊骗谎理被哭虹夏雷呀像全现彩儿童节庆祝领巾少先队主班正姐习题算客情晚楼拉扑弯腰汗搂怀

第3学期は359字。

级教室贴打扫整洁桌首赞美趣物角江活泼瞧愉泡泡迎轻迟晨稻秧紧绳牵交发表扬喜品顶漂航行乾军舰量集体丽野照相机望肩宽岸渔撒乡湾梨苹牙绕流群映裁朝霞墙报桂让闻味行热提帮助叔收椅接弟腿扳刀旁护科容易夫席戏次延演位站秩序乱定肯桔刘岁朱房挂盏灯笼奖瓣急等最捆束麻邮递信解窝然落凉爬躲屋沟蚂蚁藏伞电催锄滴盘餐粒皆辛苦查字典买教已经音母第形义便警钱夹您娃难票差啦丢街发浪数追应该奔科懂建造推器西肉抬馋直亲眼羽差嗓句极掉谜箱池塘波替裳热耳嘴鼻晴伙伴夜停转播视察寻煤炭露鸣邻居借结砍柴深刮抢修正本思久厌倦累莺练受猎坚持因念背傍湖通荷珠神平省笔始灰蜘蛛织阵丝断重冰终于结实

捕啄森治痛死壮危险伤害枯蛀周静悄忽消灭挖眠准备
食麦苗盖呼淘唱梦裙蓝舞穗丰堆仗团糕验瓶装炉融层
脏菌期阿姨敲鞠躬糖摆喷醋削蕉核瓦尼亚摸围注塞虾
吞烦吓象士熊名试冲撞翻眯齐录取

第4学期は344字。

万城翔鸽参伟铁棒磨针朝诗困娘更加功论决此数锋
泪仔细检努得错改为及格答遍赖宁育操郭拐脚昨肿绩
感蹦蹦激啼离荣烧尽晴朗净服灿换鲜艳杏洒散坡革命
烈季纪永献恭敬幸福假英华利按如或制度并冒号另施
肥符阴殷预温台息示介绍泥和挺舒蚯蚓招钻泉闹突世
界蚕姑卵桑脱嫩旧渐胖吐茧向峨蝌蚪脑袋甩鲤龟短蹲
碧肚鼓宝玲淋湿砰称关弄擦干盲绊背导脆总挽使劲举
胸精耀勿陈洪共汽售陪拾元还失男程眨鹰市舌哪保庄
稼益商卖便宜零掏呆珍靠仰指百组勺斗楚慢汉研著脾
乘暴折钢锈霉烂灾难掌握乖煮婆饿锅忘碗蛋撑柄拼灶
菜茄豆瓢翼敌纳闷睁蚜专蔬恩店司杨驶颜芳邓所切严
肃随德扁担志部产茅挑争鞋戴劝记双梁设计架观代沙
潮

毫策速并沿际蜜蜂引列莫斯附养谈派丛采讶竿溜好众
顽踩笨滚哄稳插喝骑挥卷烤蜻蜓圈啐澡镜抚塑合摔肢
传溪非怜辩龇逼嚷反秘密抗战份桶兵晃乎搜瞪杀灵

第5学期は324字。

凶猛淹没归凿渠哇耽误探抓入勤妇稍滑艰披嫂颐捞
浑含辈哪何必赁柜议模范倘单顾迅顿涕待帐剩调价贵
异豪咱千棉絮蔡薄洲禁叹筷稀烫俩赛挽胜嫌银亿除越
印曹官堵柱秤杆宰割艘沉线撒微牧泊漠茫矿兰簇拥吸
显苍吻颊蒋沈蜂仍默扎崮况慌躺屏嗅羞愧特悦曲初翠
爽透雕克但而且咬尝葡萄疆盛梯茂展搭棚串紫暗淡够
床疑霜梅凌寒独遥昼疲伏甲板休翅却崇达迷质究掂藏
郊贯溅裤致图馆者管册芥些笃呵阅览凳坦蜡糟虽强态
适孔碍钉舱港狂颠簸灌排巨竟匹愿驮坊挡伯浅鼠拦唉
筋蹄既号缝傻吵厉冻悲哀趁懒惰纷普唤丑耐待壳模瘦
讨欺侮嘲讥昏芽鹅敞希广喇叭优秀栏浙鲁幅卧仙墨砚
段历务铺药之奋都央雄耸堂词垂朽型颖荫毯辆川迹景
杰轰隆浓烟蔓救即移码拔防瑞凛冽霎罩蒙巍枕倦眉挪
逐某击仅膀胳膊踏刺骨齿证任滨赏烁芒哟仿佛腾廊迈
鞭宫猜

第6学期は270字。

厦饰榻置镇品增添氛勾勃刷厅娱媚托侧阔似峨端旗
夺眺偏舟倾征途缓射乙乐讯其技术轨浩瀚返平伊凡诺
姆宁钟要求辞凄侵犯律项担存挤副饱喂积陆续盼熬汤
胀甸瓢籽汁淌挣晃哦巧绣纹腹衬衫疾尽逃锐隐约荡漾
壁健登蘑菇悉岗歇充沸将输赢负纵跃敏捷攻着盯畅富
由佳棋乒兵逢威需袂充旅孤别扭伍调悠闲与略确咳嗽
户系股酸凶测性支炎毒环境骆驼跛缺忿哄详吗哨留至
殊系窄杯获犹豫堂委啥啾夸缘区徽兀陡峭臂狩狗狮弹
状岩饶岛崖陷峡惨划威武滩寸栖厚守社鹳雀依欲穷遇
言叛徒庙肋枪毙愤怒血铸血腥牺牲挽贺培荒耕亿竟荏
粉郑碎兜吭嚼骤恙释邀驾卸吊帜弥漫褐雾朦朧堡挨莲
蓬裂姿势翩蹈贝礁额沁焦肠哩应嘻螺捅漏

第7学期は289字。

赵州县横跨史创减固案互爪智慧遗煌艺库余尊描绘
奏杂辉亭客雅琴弦毅鼓胆裁判私弱局抵弹退良谦虚励
训谱诞匠幕降临笛阶悬哥昆攀偏帆妙聪选渐决聚缸懈
翁巷箭瞄罢葫芦扣铜坛舀沾喷瞪登澄箩至漉哪啾哄虑
卡轿帘嬉叠涛汹涌旋浆僵坠衡掠令械继罗喀嘹窟窿泛
扒塌坟墓碑袖铃筒颤抖询迁歉内宾维佩式厢值促启鸣
载圃彬菊累棠冲柿压塔屹筑幢鳞栉伐标扮又舶舵免泳
逗雁编假访庞羨慕忧据惋惜恰脏患疗批复康若忌败丧
孙惑讽蔑锣炊驻蚊帽潜伏缩揪津恨速鸣虎混恬翘拱莹
廉营摊粽浆揽劈剖诱尺剑缠嘶吼闯嘶漩涡巅拖晒善良
帝陵猿庐瀑夕垠舷抹糍柔喉囊袅拣抛犁瘦硬监扇早浇
杭链套绑粗斜咆哮燃震聒锯膨咱偷触付毕剥俗唐繁磁
宵泻翎翎鹊鹤郎牌评屑属楞恬溶

第8学期は263字。

帽汇拢忍慈祥蔼鬼味僻基础末均勉强厮资欧授贫膜
践笋揉娇阻唠叨哎辨叽喳烘裹滋润株俊俏剪凑拂伶俐
唧偶尔晕曦炽凝仪擎钮徐秒鲜须摄氏拧臃损纯绝鹳鹭
岭泊宿篱疏径未蝶艇具船蛇垫圣雇祷寂寂矗残澎湃否
窃汪肌梭贼类费植胞藻蕴储饮占暑尚享统玻璃甘谊族
曾禽兽更魏嘲惨愈玛娜补竭啞哑唇袍襟绵燥荫萌超厘
责刷联隔陌嗅寄诚悔址龄职豹芜娶媳巫伸苇褂投跪磕
溉镶宴撩括暂叨盒粥效铝例源链熄揭咽咽痰症遵嘱涤
倍脂匙搓斤隙污染惯梳趴估锡粘购涂匀晰凹凸漆页迪
咯述索瞎遏冠酷疼萎摩芬很枣陕堡缀违稚俄避皇渊若
脊悬狭眩黎刹矮锻炼役炮屡腔仇匍雹挪烽规澳浸惹愁

竺楨哆噤篇巡邏喧嘈辨譽

第9学期は220字。

沐浴魔苏伺耘馥郁哺冠瞩届锦宇权屈辱搏奥汰闭匈甚盈眶控腕吩咐茨蜿蜿蜒梢坎坝吁材攢擦揩渍振葛坝嵌搗噏焊驰喇嗨陶醉咚哒睹哇眸喘蓑笠慰勿恶亩辟榨埋榴窑篝聊冀率哼饒荆棘戳昂顷翰狄弃亏糊弄罚审警狼斩截押凭贪蹭痒稿咕噌耍跌彼遭映魄峻嘉峪砖砌秦御贸扩恋孟姜骄傲莫逃亡俭妮筹镑伦敦抒滔译逝版卷芥抽颞腕丫掰棍呛咩巢葱盐吱淀董舍撼嗒构进掩壕疯咏尘匐毁嘹赤纠乞轧涓幽缕踪糞萝卜拔猪幼循遮墩肤軀紗拄杖槐丈妻跼幃穆泣媵矫枫瑜遣渡幔硝硫拴纜窳盔僧诡妖吮箍竖抡撇涧戒寡崇

第10学期は144字。

寇晋奉撤振珊瑚岨硃啜诸妒督惩罪胶寨播口内酒援淙殖蒸翔茵风逆畔暇旷神怡域潺徙供唯谣噩耗蹂菜挎矛盾政淳朴兄争傅輶塾吉渗扯裕禄款肝饥噙债戈限茁檐啖和仆拒恐惧葱烛骂櫻桦晏君蔽矩陪囚盗臣淮柑博贡谍拘募捐邦晤俑楣镌坑铠抄耽臆圈寿醇厨沼渣莓貂淤俯沕恕怨券莒蒲艾辣椒樞斧奸漓澜瑕翡泰兀鳞响筏擅彤恍惚泗履苔扉

第11学期は120字。

盍颛掐焚跋涉袭芝沭湍妄潢钧狷亨纬苛瘫痪彰炒煎奋箕币枚怔胎斥馁旦呕沥协瞻拂邱坳蔽蝻伪甯绞呻吟歼舛婚喇赫喃诚予榜乳碌焰穹萨废墟尿逛愈斑髮婉壁藺滉怯颇瑟缶卿芯痴瞬帷逸冉衔瞰绚蓉埃殿涯叩拜妮姥戛闰捏正租毡佛匾缚狷畜汛梗蹒蹯喷磅赌冈贤快谒辅佐鹤茱萸

第12学期は145字。

倚驱滕胧咨铅浏碟喔县秉赠欣涨趟酝酿咙宛恼箠撒溢宠气碳吨肆虐沃炙灸噪崎滞碍靴穴窖创拎驯螃蟹肴蟾蜍蔗迨泌滥猗揆瘰榔锦柳橡覆踵柏梧炫鼎仁番簪髻榕桩恋颐匣纽旺肢珊瑚椽肾咏呗擲冤枉潭熏岳响筛岂唬肋踉踉露雩泄揪锤酥浼吮佑爹禡墅蘸揍噎卢辽铛醺炕悼唁浒囹囵敷佣詹挠挟劫铲劣隧岔竣藐牟彰腐匪籛俱偃强笠悸拷懦

3. 入学前の漢字教育

《語文教学大綱》では低学年の漢字学習数は累計

1800字、中学年の学習数は累計2500字、高学年は累計3000字となっているので、各出版社が出した教科書はこの《語文教学大綱》の規定に従って編集されている。上記の3教科書が示しているように、中国の漢字教育は低中学年に集中している。小学校1年生は900字ぐらい、2年生も900字ぐらい、3年生は600字ぐらい覚えなければならない。この量は入学したばかりの低学年の生徒にとってはとても負担が大きい。もし児童たちは1年生、2年生のところで何かの原因でつまずいたりしたら、後の学習はたいへん困ることになり、ひいては付いていけなくなる可能性もある。学習の遅れを避けるため、或は少しでも前に走っていくためには、漢字の学習は入学の前から始めなければならない。小学校に入学してからはもう遅い。入学前にきちんと教育しなければ、小学校の漢字学習さらに全教科の学習はたいへん骨折ることになる。この意味から言えば小学校の学習は入学前の漢字教育に左右されると言っても過言ではない。そのため、親たちは入学前の漢字教育に力を入れざるを得ない。出版社も入学前の児童向けの漢字学習の本や読み物を数多く出版している。これは中国の漢字教育の特徴の1つであろう。この漢字学習が少しでも早く始まらなければならない現象は中国語の表記に漢字以外の代用手段がないことから来ている必然的なものであるというべきかもしれない。

(1) 多種多様な漢字啓蒙教育の本

入学前の漢字教育は熱が入っている。本屋には幼児向けの漢字教育の本がいっぱい並べている。例えば、幼児向けの「三字経大文字版」,「弟子規大文字版」,「早期教育の漢字300」,「入学前の漢字600」,「入学前の四字成語600」,「入学前の語文720問」,「わらべ歌」,「なぞ解き」,「唐代漢詩」など、多種多様なものがある。中には教育部《幼稚園教育指導綱要》(試用版)に基づいて編集していると強調する本もある。確かに中国教育部は2001年に《幼稚園教育指導綱要》(試用版)を発表した。言語についての教育目標なども書かれている。しかし、それは抽

象的な表現で、とくに具体的な数字目標は明記していない。にもかかわらず本屋には《幼稚園教育指導綱要》(試用版)に基づいて編集した「四字成語720語」とか「語文720問」とかの本がいっぱいある。編集者や出版社が売るために勝手に解釈して編集していると考えられる。入学を控えている親たちの心理を利用したビジネスの行為である。しかし、他方、入学前に一定量の漢字を覚えておかなければ、入学後の学習はしんどくなる現実の側面もある。漢字の早期教育を否定できない客観的な現実がある。この客観的な側面と需要は入学前の漢字教育に拍車を掛けている。本屋に並べている一部の本の写真を掲載しておく。



(2) 古代の漢字習得の啓蒙教材《三字経》《弟子規》

漢字の早期学習は決して今から始まったことではない。昔から行ってきたことである。古代からいかに早く楽しく最小限の漢字を覚えるかをずっと研究し続けている。その研究成果の代表的なものとしては《三字経》、《弟子規》、《千字文》という漢字啓蒙教育教材をあげることができる。《千字文》はおおよそ1500年前の梁時代に作ったもの、《三字経》は800年ぐらい前の宋時代に作ったテキスト、《弟子規》は清王朝康熙帝の時代に成立したものと伝えられている。どちらも漢字啓蒙教育の教材であるが、特に優れているのが《三字経》であろう。《三字経》は3文字で1句という構造となっている。子供たちにとっては、1句の文字数が多ければ覚えにくく、少なければ乾燥無味になってしまう。中国語の音韻、リズムの特徴から見れば、3文字を1句にするのはベストであろう。古代の研究者たちはこれに気づき、

最重要の漢字1000字を選び、漢字の重複をせずに、3文字を1句に韻文風の《三字経》を作ったのである。《三字経》は漢字習得の啓蒙教材として構造がよいだけでなく、内容も素晴らしい。啓蒙の漢字を教えると同時に、中国の歴史、価値観、倫理道徳、モラルなどをも教えるのである。《三字経》は漢字習得啓蒙教材として800年以上も使い続けられ、今もよく売れている。《弟子規》も3文字を1句にしている漢字啓蒙教育の教科書である。《三字経》より500年ぐらい後の時代に成立したので、3文字1句の構造は《三字経》のまねをしたのであろう。《弟子規》も今よく売れている本の1つである。《弟子規》の良さは内容である。啓蒙漢字を教えると同時に、知らず知らずの内に子供たちにしつけや価値観をも教えている点がよく素晴らしいのである。

《三字経》出現後、多くの人々は《三字経》の構造を真似に啓蒙教材の開発を試みていたが、いまだに《三字経》に匹敵できるものは出現していない。《三字経》の素晴らしさはこれで分かる。もちろん《三字経》は現代人の視点から見れば、今の時代に合わない難しい漢字や語句があることはあるが、しかし、これは《三字経》全体としての良さの否定にはならない。今ももっとも重要な入学前の漢字啓蒙教科書の1つである。

それでは《三字経》の最初の何句を見てみよう。

「人之初、性本善。性相近、習相遠。」(人間が生まれた当初には人間の本性はもともと善である。もともとの本性は似通ったりしている。しかし、環境や教育によって習性はかなり違ってくる。)

「苟不教、性乃遷。教之道、貴以專。」(教え導きをしなければ、子供の善なる本性は変わってしまう。教えの方法としてはもっとも大事なのは専一するようにさせなければならない。)

《弟子規》についても何句かを見てみよう

「父母呼、應勿緩、父母命、行勿懶。」(父母が呼べば、遅れないように直ちに応答しなければならない。父母が命じれば、怠けないようにすぐに行動しなければならない。)

「父母教，須敬聽，父母責，須順承。」（父母の教えはしっかり聞き入れなければならない。父母の叱りは謙虚に受け入れなければならない。）

「冬則温，夏則清，晨則省，昏則定。」（親に対して冬は暖かくなるように，夏は涼しくなるように世話をしなければならない。朝には親に挨拶しなければならない。夜には親がよく眠れるように用意しなければならない。）

おわりに

上述の考察が示しているように中国の漢字教育は歴史が長く，研究も古代から行われ，素晴らしい成果がいっぱい実っている。しかし，他方，漢字教育の課題も依然としていっぱい残っている。

第1に，漢字教育の《語文教学大綱》には小学校終了時の漢字習得の目標及び低中高3段階の目標の設定はあるが，各学期，各学年における漢字習得数の明確な規定がないままになっている。そのため各学期，各学年の学習目標は使用教科書に頼るしかなく，出版社によってはばらつきが大きい。

第2に，漢字の出る順は明確な規定がないことである。教育部は9年義務教育課程に習得すべき漢字3500字に関しては，常用漢字2500字，次常用漢字1000字を発表しているが，どの学期にどの漢字が出るべきかをとくに規定していない。これも使用教科書に頼るしかない。易しい漢字でもかなり遅い段階に出る場合がある。

第3に，漢字の学習は低中学年に集中しすぎている。漢字の学習は早い段階から始まるのが後の学習に有利であるのは間違いないが，低中学年に集中しすぎると，子供たちの負担が大きい。もうすこし高学年に分散する余地がある。

第4に，入学前の漢字学習は熱が入りすぎる。小学校の低学年の学習に馴染みやすくさせるために入学前に一定数の漢字教育が必要であるのは間違いない。しかし，やりすぎるのは問題である。今の中国では明らかにやりすぎるのである。

第5に，漢字の発音である。中国には多種多様な

地方や方言があるため，同じ漢字であっても，地方によっては発音がまったく違う。標準発音の徹底は今後も課題である。

注

- 1) 今実施している《九年義務教育全日制小学語文教学大綱》は2000年に制定したものであるが，その前に1992版，1988版がある。さらにその前に1986版，1980版，1978版があり，名前も違い，《全日制十年制学校小学語文教学大綱》と名付けていた。
- 2) 2011年に制定した新版の《義務教育語文課程標準》は3章から構成している。第1章は「序言」，第2章は「課程の目標と内容」，第3章は「実施の留意点」となっている。第2章の「課程の目標と内容」では第1～4学習段階に分けて論じている。2001年には試用版を発表していた。
- 3) 人民教育出版社は教育部の傘下にある出版社で，民間の出版社とやや性格が違う。職員は1500人もいる。小中高等学校の教材の研究，編集の専門職員は370人もいる。<http://www.pep.com.cn/>。
- 4) 人民教育出版社は教育部に所属しているので，教科書に関連する資料や情報をネットで公開している。小学校の教科書はデジタル版もあり，ネットで公開している。論文に取り上げている教科書は《語文教学大綱》に基づいて編集したものである。アドレスは<http://www.pep.com.cn/xiaoyu/>となる。
- 5) 《語文教学大綱》に基づいて編集した教材である。北京師範大学出版社の基礎教育教材部のネットではデジタル版も公開している。アドレスは<http://www.bnup.com.cn>となる。
- 6) 江蘇教育出版社の2001年版語文教材による。江蘇教育出版社は「鳳凰出版伝媒公司」（鳳凰メディア会社）<http://www.ppm.com/>の傘下にある。電子版教科書については，「電子課本網」（デジタル教科書ネット <http://www.51jcn.cn/ebook/>）では複数社の電子版教科書を集めて公開している。
- 7) 「第一范文网」（第1模範文ネット）<http://zd.diyifanwen.com/zidian/szb/> によるもの。

主要参考文献

1. 陳卓君「中国の小学校における漢字教育に関する考察—漢字政策及び教材の視点から—」(千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 第277集『社会とつながる学校教育に関する研究 (2)』藤川大祐編, 千葉大学大学院人文社会科学研究所, 2014年)
2. 李軍「中国における建国後の漢字教育政策の変容—「教学大綱」から「課程標準」へ—」(学術研究: 人文科学・社会科学編, 早稲田大学教育・総合科学学術院教育会, 2012年)
3. 加藤幸次「中国の漢字教育」(地方・小出版流通センター, 2011年)
4. 陳玉邦「低年級字写字的指導」(中国教育技術装束社, 2010年)
5. 大原信一「中国の識字運動」(東方書店, 1977年)
6. 顧黄初「中国現代語文教育百年事典」(上海教育出版社, 2001年)
7. 呉忠豪「建国以来小学語文教学概述」(上海社会科学院出版社, 1996年)
8. 中文礎雄「中国のことばと文化・社会」(時潮社, 2006年)

第3部 韓国の初等学校における漢字教育の現状と課題

はじめに

韓国は地理的に中国に近く、長い間、文化的に密接な関係でかかわっていた。そのため、漢字は当然、韓国語の一部として教えられていると思われがちだが、実情はそう単純ではない。近年、学校における漢字教育の是非をめぐることは、ハングル専用か漢字混用かの両派に分かれ、激しく議論が交わされている。この論争はいわゆる「五十年文字戦争」(1998年当時)ともいわれるが、これは同じく漢字文化圏とされる日本と異なっている。そこで本論では、韓国の漢字教育をめぐる状況と、初等学校(日本の小学校)を中心に学校における漢字教育の現状について報告した後、漢字教育の課題について述べる。

1. 漢字の由来とハングル

朝鮮半島に漢字が伝わったのは紀元前300年頃とされるが、実際に漢字が使われたのは百済の支配層が漢字を使用するようになった5世紀頃といわれる。漢字が受容されたときは、日本のように自分の国の言葉で読むという「訓読み」も用いられていたが、朝鮮時代になると、そういう漢字の使い方がなくなり、漢字はただ音読、直読するだけという方式をとるようになる¹⁾。それを決定づけるものは1443年世宗大王の時に創製される「訓民正音」、すなわち今のハングルである。ハングルは表音文字で、話し言葉をそのまま発音どおりに記録することができる。

ハングル創製後、ハングルは仏教の経典の注釈や漢詩の翻訳などで多く用いられ、難しい漢文で書かれた文献を直接、朝鮮の言葉で翻訳することになった。ただし、朝鮮時代にはハングルは諺文といわれ、俗語であり、漢文の教養のない女性や下層階級が用いる卑しい文字とされ、長い間、主流の漢字、漢文に対して低い位置が与えられていた。

朝鮮時代末期になると、政治・経済の他に教育政策にも改革の波が及び、漢字とハングルの関係にも変化が起きる。1894年に国王高宗はハングルを国文として明言するが、この勅令によって、まずハングルは正式の文字として漢文に代わり、すべての法律と勅令を国文・漢文・国漢文混用文などの文体を使用することが認められた。1886年にはすでに漢字とハングル混交文による新聞が発行されるなどして、長く続いていた漢文中心の文字生活からハングル中心の文字生活への大きく転換するきっかけになっていた。

さらに周時経(チュ・シギョン)は、それまでに諺文などと呼ばれていたのを偉大なる文字という意味を込めて「ハングル」と名付けて、漢字を追放してハングルにしようという運動を起こした。その運動は朝鮮語学会(前身は1921年に始まる朝鮮語研究会、のちにハングル学会に変わる)の組織へとつながるが、国語国字としてのハングルを守ろうとする動きは、日本植民地支配下で朝鮮語廃止の受難を受

ける中で、独立国家としてのアイデンティティーを取り戻すことと一体化していく。そして朝鮮語学会は、その後、韓国における国語政策の主導的な役割を担うことになる。

以上、韓国では日本のように漢字の「訓読み」の方式を進めることなく、言葉を表記する独自の文字を創案することによって、漢字から離れ、自立した文字生活が可能になった。また韓国の場合、漢字教育は単なる言語教育、国語教育の問題ではなく、強いナショナリズムと結びついて捉えられるという特殊性をもつ。

(1) 学校教育における漢字教育の位置づけ

韓国語の語彙は大きく分けて固有語と漢字語、外来語に分けられるが、その中で漢字語のみに漢字が使われる。漢字語はさらに韓国固有の漢字語（洞口、温突、南男北女など）、中国起源の漢字語（君子、小人、狐假虎威など）、日本起源の漢字語（社會、國民、哲學、論理、自然など）に分かれる。漢字語といっても同音異義語など特別な理由がない限り、ハングルのみで表記されるのが一般的である。したがって漢字がなくとも言語生活の中で不便を感じることはほとんどなく、また生活の中で漢字を使う経験はあまりない。近年、自分の名前すら漢字で書けない若者が増えていることから、漢字非識字世代による弊害を危惧する声も多い。

こうして韓国で漢字が使用される状況は中国や日本と同じではない。中国は自国の専用文字として漢字を使用しているし、日本は、仮名と漢字を混用している。しかし韓国では、ハングルを主要文字とし、漢字はあくまでも意味を明らかにするために用いる、いうならば補助的な文字とみなされている。したがって漢字教育は国語の一部でもなく、現在に至っては基本教科として扱われているわけでもない。漢字教育は、国語科の中に組み込まれたり、国語科から外されて独立教科になったりと、その位置づけが何度も変遷していて、現在は、漢字を国語の一部とは認めない立場から国語教育から独立させて、漢文教育と称する。

ではなぜ漢字を使わなくなったのか。その原因としては、1970年から始まった漢字廃止政策によるところが大きい。その他に、韓国の漢字音は、いくつかの例外を除いてはほぼ1音節であり、ハングル1字で漢字1字を表記することができるという言語的特性が考えられる。それによって日本語における漢字の訓読みに相当する読み方が定着せず、漢文でも意味の切れ目に助詞を入れる形を読むようになった。

また日本の植民地時代（1910年～1945年）下におかれた朝鮮では、西洋の近代文明・文物のほとんどが日本を通して受容されたため、それを表す日本語がそのままの形で朝鮮語に入ってきた。その多くは今なお使われていて、たびたび日本統治時代の残滓と批判され、韓国固有語に置きかえようとする「国語純化運動」の対象になっている。

2. 漢字教育の変遷過程（1945年～2005年まで）

韓国の漢字教育の歴史における主な出来事を年代順にまとめると次のようになる。

表に示されるように、1945年には「漢字廃止案」が、1948年には「大韓民国の公文書はハングルのみに限定される。但し、当面の間、漢字を括弧に入れて使用することができる」という「ハングル専用法」が公布される。以後ハングル専用が進められて、1968年には当時の朴正熙（パク・チョンヒ）大統領によってハングル専用が宣言され、1970年から初・中・高校の教科書から漢字が排除されることになった。

まず漢字教育の教育課程上の位置づけをみると、中・高校においては、それまでの必須教科として漢文教科は第6次教育課程では選択科目になり、第7次教育課程では、日本語、ドイツ語、フランス語などと同じく第2外国語として編成されることになった。ちなみに2010年の調査では、漢文教科を選択したソウル市内中学校は145校で、全体の37.9%に過ぎなかったとされる。

初等学校で漢字教育が行われたのは、1949年から1967年までの約18年間だけで、その時は約1000字から1300字程度の漢字が教えられていた。また初等学

1945年	12月	朝鮮教育審議会により初・中学校の教科書はハングル表記にするが必要な場合は漢字を括弧に表記することを決議
1948年	10月	ハングル専用法の公布 (ただし初等学校4～6年生用の国語教科書における漢字併用は1965年まで継続)
1951年	9月	常用漢字1200字, 教育用漢字1000字選定
1955年	8月	中学校では漢字, 漢字語指導, 高校では漢字, 漢文の指導実施
1957年	11月	教育漢字300字追加
1963年	2月	教科書の漢字を括弧なしで表記する
1968年	1月	大統領によるハングル専用の宣言, ハングル専用5か年計画案を公表
1970年	3月	ハングル専用化政策で初・中・高の教科書から漢字削除 中・高校用の基礎漢字1800字選定発表
1974年	12月	第3次教育課程で中学校・高校の漢文が独立教科となる
1988年		ハングル専用紙であるハンギョレ新聞創刊
1992年	3月	第6次教育課程で初等学校の裁量時間に漢字指導が可能になる 中・高校の漢文科目が必須から選択に変わる
1993年		漢文が大学修学能力試験科目から除外される
1998年	3月	第7次教育課程で裁量時間における漢字教育を削除
1999年		金大中大統領により漢字併用の拡大指示 国会で公文書における漢字併記が議決される
2000年		歴代首相20人が署名した「初等学校漢字教育推進建議書」を大統領に提出
2005年	2月	「国語基本法」の制定 漢文が大学修学能力試験の第2外国語の選択科目に含まれる

校の教科書をみると、1学年から3学年の場合、1945年から現在まで一貫してハングル専用、4学年から6学年の場合は、1945年から1970年まではハングル漢字混用、1970年以降はハングル専用となっている。

ハングル専用化以降、韓国の語文政策は一貫してハングル専用を押し進める方向であったが、漢字教

育の重要性を主張する学界や団体から反発も強く、教育課程が改訂されるたびに漢字教育実施の是非が大きな問題となっていた。特に近年になると、2000年に歴代首相20人が初等学校における漢字教育を促す建議書で大統領に提出するなど、社会各界から漢字教育の実施を望む声がさらに高まっていた。こうした動向は、中国との政治・経済的な交流が頻繁になっていくといった国際情勢の変化を念頭においたもので、初等学校における漢字教育の導入と中・高における漢文教育の強化を求めている。

2005年に制定された「国語基本法」では、「公文書はハングルのみを使用しなければならない。但し、大統領令が定める場合には、括弧内に漢字または他の外国文字を使用できる」とし、ハングルと漢字やその他の外国語との併記も許容している。しかしこの文言に示されるように、漢字は国語の一部ではなく、外国語の一つとして扱われていて、次に取り上げる2015年の教育書課程改訂で再び、初等学校の漢字教育の在り方が問題視されるのである。

3. 2005年以降の漢字教育をめぐる状況

2014年9月、韓国の教育部（日本の文科省に当たる）は、「18年から初等学校3年生以上が使う教科書にハングルと漢字を併記する法案を推進する」と発表した。具体的には、「生徒たちに漢字教育が足りず、意思疎通などに問題があることを考慮した」上で、18年には初等学校3・4年生、19年には5・6年生の教科書に、漢字400～500字をハングルと併記する教科書執筆基準指針を2015年末までに用意することを明言した。これによって漢字が初等学校の教科書から無くなった70年の「ハングル専用化」政策から、48年ぶりに初等学校の教育現場に漢字が復活することになったかのように見えた。

「初等学校漢字教育案」は、教科書の語彙を表記する際にハングルと漢字を併記するというもので、文章中に漢字を混ぜて使う「混用」とも異なるし、ましてや漢文科目を新しく設置するものでもない。しかし現場で漢字を教えなければならない教師たち

の反発は強く、この発表後、ハングル関連団体や教職員労働組合などから「一方的な推進」「私教育に負担を与える」などを理由に、激しい抗議活動が起きている²⁾。

教育部の発表後、漢字教育に賛成か反対かの主張が連日メディアを賑わしていた。世論を二分する事態から結局、2015年9月22日の教育部の発表では、初等学校教科書漢字併記については撤回され、「暫定的には教科書の左右の欄外や脚注部分に漢字を入れたり、単元の最後に漢字を露出させ、児童たちが漢字に親しみを感じられるようにする」とし、適正な漢字字数と表記方法を研究し、2016年末に発表することにした。こうして2015年度改定教育課程の告知と同時に漢字併記の基本方針も発表される予定だった初等学校の漢字教育の見込みは一步後退したことになる。

初等学校における漢字教育実施の是非をめぐっての対立は今回が初めてではない。漢字教育に対するハングル専用論とハングル漢字混用論、それぞれの主張を取り上げてみよう。

(1) 漢字復活論

初等学校の漢字教育の必要性を力説する人々は、その理由として次のことを上げている。

- ①漢字は古くから使われた文字であり、それは韓国語の一部である。
- ②ハングルのみでは同音異義語を正確に理解することができない。しかも韓国語の語彙の約70%は漢字語由来ものであるため、ハングルだけでは言葉の意味を正確に知ることができない。
- ③漢字は基礎語彙力だけでなく専門的な語彙を理解するのに役に立つので、国語のみならず、他の教科の理解にも役立つ。
- ④実生活を営む上で漢字を知っていることが役に立つ。
- ⑤伝統文化の継承発展と文化のアイデンティティを維持するために漢字教育が必要である。
- ⑥東アジア文化圏下にある中国・日本と共通の文字を使用することで、円滑な意思疎通や交流を図る

ことができる。

- ⑦言語学習には適期があり、初等学校段階が言語学習の最適時期である。
 - ⑧中・高校の漢文学習を充実化するために、初等学校で一定の水準の漢字教育が必要である
- こうした主張の背景には、1990年代学校で漢字・漢文教育を受けることができなかった20～30代の社会人たち、いわゆる「ハングル世代」においては、基本的な漢字さえ知らず、漢字が読めない、自分の名前が書けない、語彙力が貧弱になっているなどの弊害がたびたび指摘されているという事情がある。またハングル専用の政策が続いた結果、漢字で書かれた専門文献を読める人が少なく、もはや専門研究ができない状況といわれる。

(2) ハングル専用論

一方、ハングル専用論の基本的な論拠は次のようである。

- ①初等学校での語彙力とは文脈によって理解するのがより適切である。
- ②実生活で漢字の影響はあまりなく、漢字を知らなくても生活する上で不便を感じない。
- ③伝統文化の継承発展のためなら漢字よりハングルのほうがもっと重要である。
- ④漢字文化圏といっても国によって漢字が変形され使われている。共通の文字としての役割はあまり期待できない。
- ⑤漢字教育は子どもたちの学習負担を増やす恐れがある。
- ⑥初等学校ではまず国語力をしっかりと身に付け、漢字は中学校から学ぶ方が望ましい。
- ⑦英語教育重視で、最近、韓国語能力が相対的に落ちる学生が増えている。漢字教育はさらに国語能力の低下を招く可能性がある。
- ⑧教科書に漢字併記をすると、文章を読むのにむしろ邪魔になる場合が多い。

国語力の低下や学習負担の増加などといった意見は教育的に論じられるべきであるが、漢字を知らなくても社会生活をする上で特に問題がないという見

地に立てば、漢字はすでに外国語化してしまったので、改めて学習する積極的な理由を見つけないのは難しいかも知れない。

4. 初等学校における漢字教育の現状

以下においては韓国の初等学校における漢字教育の現状を見ていく。

韓国で現在施行されているのは「2009年改訂教育課程」である。これは第7次教育課程（2000年～2007年）の問題点を補完した「2007年改定教育課程」を、さらに創意に富むグローバルな人材の育成を目標に掲げて改善したものである。

初等学校の教育課程の詳細は次のようである。

〈初等学校時間配当基準〉

区分		1～2学年	3～4学年	5～6学年
教科 (群)	国語	国語 448	408	408
	社会 / 道徳		272	272
	数学	数学 256	272	272
	科学 / 実科	正しい生活 128	204	340
	体育	賢い生活 192	204	204
	芸術 (音楽 / 美術)	楽しい生活 384	272	272
	英語		136	204
創意的体験活動		272	204	204
学年群別 総授業時間数		1,680	1,972	2,176

〔出典：洪厚祚著『分かりやすい教育課程』ハクジサ、2013年、p.410〕

漢字教育との関連で注目すべきことは、汎教科活動としての「創意的体験活動」である。創意的体験活動は、配慮と助け合いを実践できる人材を養成することを目標にして、「自律活動」、「サークル活動」、「ボランティア活動」、「進路活動」の内容で構成されるが、漢字教育はこの中で実施することができるかとされる。

そもそも初等学校において漢字は、正規の教科でもなく、国語教育の一環としても実施されることはなかったが、第6次教育課程では、年間34時間、初等学校3年から6年まで学校裁量時間が設けられ、コンピューター、漢字、環境といったテーマの中から一つ選択することができた。漢字教育もこの枠内で週1時間行うことができたが、第6次教育課程の改訂で英語を導入するに伴い、漢字指導の時間確保が困難になった。第7次教育課程では1学年から6学年まで週2時間の裁量時間が配当されていたが、週1時間はコンピューター教育に割り当てられ、漢字教育は週1時間になった。さらに2009年からは5学年から6学年の裁量活動時間に年間17時間以上、保健教育の実施が求められ、結果として漢字指導のための学習時間の確保はさらに難しくなっている。

教育課程からは漢字教育に対する明確な指導指針が示されていないが、実際にはそれぞれの学校において多様な形で漢字教育が行われている。ここでは진철용(チンチョルヨン)が2009年に全国の初等学校122校を対象に行ったアンケート調査に依拠しながら現在の初等学校における漢字教育の現状を確認する³⁾。

初等学校では教育課程上、漢字関連教科が設けられていないため、教科書がなく、各教育庁、または各学校で自主制作することが多い⁴⁾。ちなみに中学校、高校の選択科目としての漢文は、中学校で900字、高校で900字と、教育用基礎漢字1800字と決められている。また中・高校では認定教科書か検定教科書を使うことになっている。

以上、各学校においては独自の判断で漢字教育に取り組んでいる。また漢字教育の内容は、語彙力を高めることが重視されていて、初等学校では約600字前後を一つの目安としている。また現在、初等学校で漢字指導ができる時間は、朝の自習時間、創意的体験活動、特別活動、放課後学校(特技適性指導)の時間となっているが、同調査対象の学校では、漢字指導の時間は、裁量活動時間が55.8%、朝の自習時間が38.1%とされる。

1. 漢字教育の実施様相

①学校の方針により全学年で実施	58.2%
②学校の方針ではないが、学年単位で自主的に実施	12.3%
③学校、学年の方針ではないが、学級独自に実施	19.7%
④実施しない	4.9%

2. 漢字教育の実施状況

①学校の教育課程の中に漢字教育を取り入れている	63.1%
②何らかの形で漢字教育を実施している	90.2%
③漢字関連の試験や大会を運営している	44.3%

3. 漢字教育を実施する理由

①教育庁の方針	13.6%
②学校長の方針	50.9%
③教師個人の方針	25.4%
④親の要請	26.7%
⑤その他	6.4%

4. 指導の内容

①漢字の文字中心	38.0%
②漢字語（語彙）中心	61.1%
③漢文中心	0.9%

5. 指導する漢字の数

①600字程度	62.3%
②900字程度	14.1%
③1000字程度	12.3%
④1800字程度	3.8%
⑤その他	7.5%

6. 教材

①教育庁認定図書	35.7%
②学校自主制作	24.1%
③市販の教材	27.7%

5. 韓国の漢字教育の課題

韓国の漢字教育の現状からは、以下のような課題が指摘できる。

①まず、漢字教育の意義をどのように捉えるのかといった問題がある。漢字は国語の一部なのか、外国語なのか、それによって、初・中・高校における漢字・漢文教育は教育課程上の位置づけもおおのずと決まってくるのであろう。

②教科書における漢字表記の問題である。表記の方法としてはハングル漢字併用・併記、ハングル漢字混用があるが、①で指摘した問題が解決されない限り、教科書における漢字表記をめぐる混乱は今後も繰り返されるのではないかとと思われる。

③英語などの外国語のように、学習するだけで実生活ではあまり使うことがなければ定着しにくい。生活の中でも使えるような環境づくりは可能なのか、あるいはそもそもそういう環境を作る必要はあるのかどうか問われる。

④正規の教科でない場合は、漢字教育のための時間確保、また体系的に学習できる教科書作りと専門的な教師養成なども解決しなければならない問題である。

⑤最後に、漢字文化圏における相互交流の観点からすれば、日本・中国・台湾・韓国など、漢字を共有する国間の協力が求められる。たとえば、日中韓3カ国の共通常用漢字を選定することを目指す研究成果に基づく国際的な漢字教育の在り方も可能なのではないだろうか。

おわりに

以上、本論では韓国の漢字教育の現状について、特に初等学校の漢字教育を中心に紹介した。それによって韓国の漢字教育の最大の問題は、漢字を教えることについての教育的意義に対して社会全体で共通認識が得られず、語文政策がたびたび変わることにあるといえる。ハングル専用化が推進されてもう60年以上経つが、この問題はいまだ決着がつかず、初等学校教科書の漢字併記問題で再燃している。70

年代以降、国の政策として一気に進められてきたハンゲル専用化の流れが急に変わることはないと思われるが、ここに来て漢字教育が必要とされる社会情勢の変化にも十分に配慮した上で、2016年度には最善の語文政策を打ち出してくれることを期待している。

注

- 1) 金文京『漢文と東アジア』岩波文庫、2015年、pp.94-100
- 2) 2015年4月に全国の2200人の初等学校教師を対象に行った全国教職員労働組合(全教組)のアンケート調査では、87.8%の教師が「漢字併記に反対する」と答えた。また初等学校国語教育学科の調査では、全国初等学校教師1000名の内、65.9%の教師が教科書の漢字併記に反対すると答えた。また全教組が全国の初等学校4年生から6年生の1400人に教科書の漢字併記についてどう考えるのか尋ねたところ、1114人(78%)が「反対する」と答えた。
その一方、韓国教育課程評価院が全国19歳以上の一般人500名を対象にアンケート調査した結果では、62.8%が初等学校の教科書の漢字併記に賛成すると答えた。反対は29.6%で、大多数の人が賛成するという結果となっている。また同院が2009年父兄と教師5200余名を対象にした調査では、父兄の89.1%、教師77.3%が初等学校漢字教育施行を賛成する結果となっていて、教職員団体による調査と全く異なる結果が出ている。
- 3) 진철용 (チンチョルヨン)「初等学校の漢字教育の現況と展望」(『漢字漢文教育』Vol. 23, 2009年11月, pp.33-36)
http://www.studyhanja.net/html/sub3_01.html
- 4) ソウル市教育庁は、3学年から6学年までの創意的体験活動の時間、放課後学校の時間における漢字教育用教材として、国語、社会、数学、科学の4教科の教科書の中で使われる漢字語由来の単語を900語内の範囲で選定して説明を加えている。また自学自習用のページも作られていて、ネット上にアップロードしているので誰でもプリントアウトして使うことができる。

(<http://buseo.sen.go.kr/web/services/bbs/bbsView.action?bbsBean.bbsCd=94&bbsBean.bbsSeq=4798&ctgCd=200>)

主要参考文献

1. 堀 誠編著『漢字・漢語・漢文の教育と指導』(学文社、2011年)
2. 金文京『漢文と東アジア—訓読の文化圏』(岩波新書、2015年)
3. 丁允英「韓国における漢字・漢文教育の現状について」, 堀 誠編著『漢字・漢語・漢文の教育と指導』(学文社、2011年, p.201-217)
4. 豊田有恒『韓国が漢字を復活できない理由』(祥伝社、2012年)
5. 漢字を捨てた韓国—韓国文字政策の歴史—(<http://www.geocities.jp/kiteretsuchop/ronbun/kanji.html>)
6. 박창원 (パクチャンウォン)『韓国の文字ハンゲル』(花女子大学出版部、2014年)
7. 洪厚祚『わかりやすい教育課程』(ハクジサ、2013年)
8. 진철용 (チンチョルヨン)「初等学校漢字教育の現況と展望」(『漢字漢文教育』第23輯, 韓国漢字漢文教育学会, 2009년, pp.25-48)
9. 윤재민 (ユンチェミン)「初等学校漢字教育の体系と内容」(『漢字漢文教育』第23輯, 韓国漢字漢文教育学会, 2009년, pp.147-186)
10. 한은수 (ハンウンズ)「初等学校教育用漢字語彙選定方案と例」(『漢字漢文教育』第29輯, 韓国漢字漢文教育学会, 2012년, pp.7-85)
11. 宋秉烈「初等学校漢字教育方向定立と実行方案」(『漢字漢文教育』第25輯, 韓国漢字漢文教育学会, 2010年)
12. 金辰淑「初等学校漢字教育についての要求調査」(『漢字漢文教育』第二十四輯, 韓国漢字漢文教育学会, 2010年)
13. 한경철 (ハンギョンチョル)「初等学校漢字教育活性化方案についての研究」(国際文化大学院大学, 2012년)

結語

本稿では日中韓三か国の漢字教育の現状と課題について論じた。三か国の漢字の使用状況はそれぞれ事情が違うが、共通して漢字教育の課題を抱えている。上記の論述を通しておよそ下記のようないくつかの点がまとめられよう。

日本の場合、小学生は、漢字だけでなく、仮名（片仮名，平仮名）やローマ字を学習しなければならない。そのため、低学年では表音文字である仮名の学習が優先されており、漢字は中学年に多く配当されているのが特徴的である。

小学校の漢字習得総数は1006字であり、中等教育修了までに2136字種の漢字を学習することになっている。

中国から取り入れられた漢字は、日本語にとけ込む過程でさまざまに変容されており、複数の発音（音読み，訓読み）や用法をもつ漢字が少なくない。また、漢字学習のための専用教科書がなく、漢字の書体として「教科書体」や「明朝体」などがあるこ

とも、漢字学習上の困難の原因となっている。

中国の小学校の漢字習得数は3000字と設定され、非常に多いばかりでなく、低中学年に集中しているのが特徴的である。今後小学校漢字習得数の削減や高学年に分散するのが課題であろう。

中国では常用漢字3500字は教育部が指定しているが、出る順や各学期，各学年の習得数についてはとくに指定していないので，使用教材に頼るしかないのが現状である。

中国の入学前の漢字教育は熱が入りすぎて，改善すべきであろう。

韓国の国語政策の基本はハングル専用化の推進であるが，漢字併用の主張も根強く，1990年代からは中・高校の漢字教育の位置付けや初等学校での漢字教育の復活を求める声もますます高くなっている。本稿第3部では，このような漢字教育をめぐる韓国特有の社会状況と初等学校における漢字教育の現状を紹介し，漢字を教育する意義を明確にすることが今後の漢字教育にとって大きな課題であることを指摘した。

Current Status and Problems of Chinese Characters Education in Japan, China and South Korea

NAKAFUMI Soyuⁱ, ITO Takashiⁱ, No Jaeokⁱ

Abstract : Japan, China and Korea exist in a cultural sphere characterized by Chinese characters. From ancient times to the present, Chinese characters have been the only form of writing used in China.

Chinese characters are used together with kana in Japan, but when Chinese characters do not come to mind, kana can be used as a substitute.

Chinese characters have been abolished in Korea and only the Hangul alphabet is used. But Korea distributes teaching materials for Chinese characters education at elementary school level and lets voluntary learning unfold. Chinese is established as a subject in junior high school and high school, aiming for the acquisition of 1,800 Chinese characters.

The situation of the Chinese characters used in these three countries is completely different, but there is a common problem with regards to Chinese characters education.

Being concerned with Chinese characters culture, the present researchers started a research project and made a comparative study about Chinese characters education in these three countries.

This paper clarifies the present conditions and problems of the Chinese characters education in Japan, China and South Korea.

Keywords : Chinese characters education, Chinese characters enlightenment education, Chinese language teaching outline, "Hangul only" policy abandoning Chinese characters, Korean mixed script making use of Chinese characters, reintroduction of Chinese characters into schools

ⁱ Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University